慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	2015年度藝文学会シンポジウム「幻想と文学」：質疑応答
Sub Title	Discussion
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.110, (2016. 6) ,p.116 (155)- 121 (150)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2015年度藝文学会シンポジウム「幻想と文学」 開催日: 2015年12月11日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール 冊子には前からの通しページあり
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01100001-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2015年度藝文学会シンポジウム「幻想と文学」

質疑応答

コメンテーター（宇沢美子／英米文学専攻）：三人のご発表をそれぞれ興味深く聞かせていただきました。まず、和泉先生の場合は、神獣一角獣や、幻想と建築が合わさった迷宮といった、何かしらの幻想的デザイン (design) が、全世界的に時代を超えて、変容を遂げながら、各文化圏のなかでどのような意味を作り上げていったか、という比較表象論のお話としてうかがいました。私が特に面白く感じたのは、こうした幻想表象が、多神教と一神教（キリスト教）の境界線を超えて延々と生き続けたことです。というのも、「表象」という概念において、多神教と一神教では真逆の考え方をもっている場合があり、たとえば、ギリシア神話にあらわれる多神教世界観では、聖なるものは必ず表象されなければならないという命題があるなら、もう一方、一神教キリスト教の場合は逆に、聖なるものである神は表象されてはならないという命題があります。にもかかわらず、一角獣は、ギリシア神話をこえて、中世キリスト教という一神教の世界の中でこそ、多義性と特徴的なビジュアル・イメージを獲得していったところに新鮮な驚きを感じました。一角獣や迷宮が、海をこえ陸をこえ流通し、変化・変容していくなかで、ある場所に固有の文化幻想が、むしろコスモポリタンな、大きな意味での普遍性のようなものを獲得し得た、という点に、和泉先生の大きなご研究の核心をみたように思います。明治以降ヨーロッパ建築の影響を受けた日本でも、迷宮・迷路「デザイン」を探ることで、変種のモダン日本が見えてくるかもしれません。恐らく、和泉先生の一角獣研究と迷宮研究のあいだに、建築論としての「塔」、聖なる塔をめぐる先生のご研究が位置付けられるのではないかと思いながら拝聴しておりました。

二人目の藤原先生は折口信夫の研究者でいらっしゃいますが、今回は「幻想の沖縄」ということで、客人（まれびと）研究の前に、折口が沖縄で何を見ていたのかというテ

ーマのお話でした。琉球処分が行われたのが明治十二年、沖縄で日本語が共通言語として使われるようになったのが明治三十年代、共通言語として定着したのが明治四十年代です。そのあと十年もしないうちに折口は沖縄をおとずれていた。そこで彼は、女性が祝祭性や聖性を担う祝女（のろ）の世界を探究し、古代ロマンの欠片を拾い集めた。普段ならば見逃してしまうような日常世界のなかに、その外へと通じるある種のコードを見つける作業を折口がこの時期沖縄で行っていたことの意義を、藤原先生のお話から勉強させていただきました。私からは一点質問ですが、祝女／巫女の特異性に、彼女たちのセクシュアリティはどのように関わっていたのでしょうか？　というのも、沖縄の遊女の特異性は、遊女が聖性を獲得していることにあると、立教大学の渡辺憲司先生のご著書に教えられたことがあり、聖なる祝女の世界に、生と死だけではなく、セクシュアリティの問題、すなわち、聖のなかに立心偏の「性」というものが、いかなる形で関わっていたのか、をこの機会にぜひご教示いただきたくお願いします。

最後の松村先生のお話も大変感銘深く聞かせていただきました。明治の十年代位～三十、四十年代にかけて、日本が激変していた時代。近代国家や父権制というものが、西洋からやって来て、「今ここ」という時空間認知や身体の認知から、「私」という概念の生成、「国」という概念の変容まで、ありとあらゆるものが、日常生活のレベルにおいても非常に抽象的なレベルにおいても、組み替えられていった時代に、泉鏡花の文学は形成されていた。それを細密なテクスト解釈で裏付ける松村先生のお話をうかがい、鏡花の文学に西洋文学を学ぶ者が親しみやすさを感じる理由がわかり、目からウロコが落ちるとはこういうことだと感激しました。とくに動植物と人間の境界があやうくなる幻想から拒食が誘発されていく「三尺角」の世界には、たとえばカナダ人作家マーガレット・アットウッドの拒食・過食文学を何十年も先取りするものをみることができるでしょう。また、『化鳥』が出版された 1897 年のイギリスでは、ヘンリー・ジェイムズの『メイジーの知ったこと』(*What Maisie Knew*) が発表されています。これは、小さな女の子の限られた純朴な視点から、周りの大人たちの不倫だの離婚だのドロドロな人間関係が語られていく作品です。鏡花の『化鳥』では男の子が、まわりの「偉い」大人たちの言葉を、自分の小さな意識の中に浮かべて、それを母親との共犯関係に繋げていく語りをする。鏡花のうちに、西洋と同時代進行していた非常に新しい語りの形が作られていたように思えます。まただからこそ、同時代の日本

の批評は、鏡花のこうした前衛的な語りを肯定的に受容できなかったというご指摘に、妙に納得するものがありました。また、松村先生は、“heart” と “head” という二項対立を挙げながら、明治期を「近代化」と「滅びゆくもの」の相対として捉えていらしたと思うのですが、そうなるとたとえば、少年の語りはどこまでが少年のものでどこからが母のものなのか、母と子の意識の境界線を引くことが非常に難しいように思えるこの語りが持つ、論理力は一体何なのだろうか、と問いかけたくなります。この論理力は、「滅びゆくもの」に通じ、上から目線ではなく、常に下から、社会的な弱者が、松村先生の言葉を借りるなら、「痛苦」を通して語ることに依拠していますが、時としてそれは「笑い」にも通じる。たとえば、女の先生が「人間が一番えらくて動植物は言葉を喋らないでしょう」と説明した時、子どもが「でもあの菊の方が先生よりもきれい」と言ってしまい、先生がギャフンとなる場面。先生にとっては痛苦かもしれませんが、読者にとっては明らかに笑いを醸し出す場面に思われます。絶対的に、近代化や西洋化の流れを覆すことは出来ないけれども、笑いによって人は小さく反逆できるという面も、この『化鳥』の語りにはあったのではないでしょうか。鏡花文学の「笑い」という点について、先生にぜひご教示いただければと思います。

以上、簡単にコメントと質問ということで終わらせていただきます。

司会：宇沢先生、ありがとうございました。それでは和泉先生から、宇沢先生の意見を聞いて何かございましたらお願いいたします。

和泉雅人：一言申し上げますと、塔や迷宮、一角獣などは、宇沢先生がおっしゃるとおり、根底にある普遍的な思想的部分は繋がっていると思います。「塔と迷宮」という論文を書いた時も、上から見たら塔とは迷宮ではないか、という発想の切り替えがあったと思います。螺旋的、あるいは同心円的な元型表象がまず人の想像力のなかに存在し、そこから立体的あるいは平面的な展開がなされたと考えることも可能でしょう。そして、搭や迷宮の表象はもちろん空間表象の系列に連なりますが、一角獣のほうも、日本における表象などを分析しますと、空間的に都を守護する古代の四神獣として東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武が挙げられる事が多いのですが、これらのひとつとして麒麟＝一角獣というものが挙げられることもままありますし、またこれら四方角に鎮座する四神獣に加え

て、中央に位置するものとして麒麟／黄龍が挙げられることもございます。これは中国から渡った麒麟＝一角獣が瑞獣のなかの瑞獣として認識されていたためであるとも考えられます。幻想的なイメージや構造を考察する場合、こういった空間的な表象が大きな手がかりになることが多いということを、一言申し上げておきたいと思います。

司会：では、藤原先生、お願いいたします。

藤原茂樹：難しい質問だと思います。平安の頃に書かれた遊女記などでは、仏の名前をつけた遊女がいるので、立心偏の「性」にひじりの「聖」があるのはいわば当たり前のように思います。その逆の場合は、折口の言葉でいうと、「神の嫁」が非常にはっきりと意識されていたと思います。「神の嫁」というワードで考えていたかどうかは別として、折口の久高島の祝女の例を取りあげました。久高というのは、男たちが、年間を通して、外洋へと出かける漁業に従事する点で、糸満と一二を争う島です。男たちは一年のわずかな期間しか島にいない。これが他の村における祝女と一緒かどうかは別ですが、久高の場合、そのわずかな期間だけ結婚するのですが、なんとかわいそうなことに、大正の頃の祝女は、結婚式を挙げた夜から森に逃げ込むことになる。森は男が入れない聖なる場所なのです。昼間になると森から出てきて旦那の家の手伝いをし、夜になるとまた森に逃げる。それを七十数日間も続けたというノロもいたといいます。そういう意味で、

聖なるものの側にいる女性は、簡単に人間の男の性は受け入れられないという建前のようなものがあって、それが古い時代においてはある程度実行されていた。現在は、小さな村ですから、子どもが出来ないとやはりよくないので結婚をせざるを得ない。しかし、そういう現実的な問題とは別に、聖なるものの側から男の性を一旦は拒否する、ということはあり得るだろうと思います。ただし、私が聞いた中には、石垣島のツカサさん（沖縄本島のノロにあたる）のお話があり、病気・巫病になることを通じて、そうしたものになっていく決心をするそうです。そういう場合、既に結婚していることもあるので、旦那さんは上手にサポートしていく夫婦円満の例も少なくありません。答えになっているか分かりませんけれども。

司会：では、松村先生、お願いいたします。

松村友視：私の方もかなり難しい質問に思われます。笑いにもいろいろ種類がある訳ですが、先生がおっしゃったのは、ある種のユーモアとして捉えられるかもしれません。たとえば、『化鳥』で、偉そうな紳士が出てくる場面で、母親は子どもに「ああいうのを博士ぶりと言うんだよ」と言うのですが、子どもは「魚のブリには見えない、でっぷり太っているからアンコウだ」と考えて、アンコウ博士というあだ名を付ける。こういうカリカチュアライズというのが、一方ではユーモアに繋がる。また一方では、この母親は、人に高見で見物され、笑われるという経験をしており、その笑いを反転するものとしても捉えられると思います。『夜叉ケ池』との繋がりを指摘しましたが、『夜叉ケ池』では、最後の大洪水の場面で、人間たちが魚や貝になっていく様子を、舞台の上から眷属つまり妖怪たちが大笑いしながら見ています。まさに舞台空間の上に人間ならざるものの世界があり、それらが客席に向けて嘲笑する図式がある。テクストとしてのユーモアには、かなりイロニカルなものもあるし、さらにある種の認識のありように対する嘲笑というものも重なっているかと思います。難しい問題ですが、いくつかの側面があるように思われます。

司会：皆さんありがとうございました。パネルとディスカッションがたいへん盛り上がったため、何と休憩なしという長丁場になってしまいましたが、時間が経

つのを忘れてしまうほどに、先生方のお話、宇沢先生のコメントが大変スリリングなものであり、みなさんとともに充実した時間を過ごすことができて、こんなにうれしいことはありません。

本日は、ご来場いただき誠にありがとうございました。